

フィールドワーク便り

「労働移民」はいかにしてつくられるのか

—インド技能実習生送り出し機関を事例として—

濱 谷 真理子*

はじめに

フィールドワークの延長のようなものとして、筆者は2023年6月から約5ヵ月間在インド技能実習生送り出し機関に勤務していたことがある。技能実習制度についてほとんどまったく知識がなかったが、生活のために日本語教員の職を探していたときに、たまたま見つけたのが送り出し機関の仕事であった。そして、送り出しビジネスの実態やまるで軍隊のような教育システムに一種のカルチャー・ショックを受けた。現代日本で喫緊の課題となっている「労働移民」の確保と供給がどのように成り立っているのか、その一端を描いてみたい。

技能実習制度の概要

技能実習制度は1993年に成立した、発展途上国とされる地域の若者が最長3年間、知識や技術の習得を目的として日本企業で実習を行なうことができる制度である。2024年6月時点で技能実習生の総数は42万5,714

人。出身国の上位5ヵ国は、①ベトナム（20万3,877人）、②インドネシア（8万7,090人）、③フィリピン（3万7,914人）、④ミャンマー（3万1,069人）、⑤中国（2万6,780人）となっている。¹⁾ 技能実習制度はこれまで実習の名目で最低賃金で長時間労働に従事させられることや、原則として3年間転職できないこと、職場での暴力や差別的な待遇などが問題とされ、「奴隷制度」として批判されることも多かった。その一方、2016年には技能実習法が制定され、人権保護や待遇改善が試みられてきた〔栗田2018: 50〕。さらに、2024年6月に技能実習制度に代わって新たに育成就労制度が創設された。新制度では日本語能力レベルなどに関する受け入れ時の条件が緩和され、条件を満たせば転職も可能となるなど、より多くの人材確保・育成を目的として制度の見直しが図られた。²⁾

インドに目を向けると、技能実習制度が開始されたのは2017年と遅く、2024年時点

* 岡山大学文明動態学研究所

1) 出入国在留管理庁公表資料参照。〈https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00047.html〉（2025年3月15日最終アクセス）

2) 厚生労働省公表資料参照。〈<chrome-extension://efaidnbmnnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mhlw.go.jp/content/11601000/001301676.pdf>〉（2025年3月15日最終アクセス）

で技能実習生は 884 人とまだまだ少数であるものの³⁾、在日インド人の総数が伸び悩むなかで着実にその数を増やしつつある。また、人材不足に悩む地方中小企業や介護業界の期待は大きく、ポテンシャルは高いといえるだろう。

技能実習生送り出し機関

それでは、インドの人びとはどのように技能実習生になるのか。次に在インド技能実習生送り出し機関のひとつ X 社を事例として、送り出しの仕組み及び教育実践についてみていこう。

日本本社の子会社として 2018 年に設立された X 社は、インド国内では首都デリーのほか 4 ヶ所でセンターを運営している。デリーセンターのスタッフは、マネジャー 1 人、経理担当 1 人、営業・広報担当 1 人、庶務兼学生管理担当 1 人、筆者を含む日本語教員 3 人の計 7 人。スタッフのうち日本人は 2 人（教員）、ほか 5 人はインド人である。筆者の業務は、N4 クラス⁴⁾への日本語教育・生活指導を中心に、受け入れ企業の面接練習、学生管理業務、来客対応などであった。

送り出しの構造はこうである。まず、営業・広報担当が関連教育機関やエージェントなどにはたらきかけて学生をリクルートする。志願者は、簡単な入学試験の後入学金 3

万ルピーを支払うことで入学できる。入学後、受け入れ企業から面接申し込みが入った際に面接を受け、合格者は 10 万ルピーを支払い日本語カリキュラムの修了及び入国手続きを進める。最終的にビザと COE (Certificate of Eligibility)⁵⁾ を取得した後に残り 14 万ルピーを支払って日本へ渡航できる。カリキュラムは 6 ヶ月、渡航手続きも含めると、企業の要望やビザの取得に要する時間などで差はあるが、順調に進めば合計 8 ～ 9 ヶ月で技能実習生として日本へ行ける仕組みとなっている。

入社当時のデリーセンターは N4 と N5 の 2 クラスで構成され、学生の総数は合計 20 数人だった。筆者が担任を務めた N4 クラスは当初 7 人で、出身・居住地の内訳は、デリー 1 人、ウッタル・プラデーシュ州 2 人、ハリヤーナー州 1 人、ラージャスターン州 1 人、マハーラーシュトラ州 2 人で、18 ～ 24 歳の男性だった。7 月にもうひとり、マニプール州出身の介護職志望の女性（29 歳）が入校してきたが、女性はそのひとりだけだった。

センターの日常生活

センターの教育実践は軍隊のように厳格なルールに基づいた規律訓練を特徴とする。たとえば、センターの時間割をみてみよう。

3) JETRO 地域・分析レポート「介護などで始動、インド人技能実習生」参照。〈<https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/special/2019/0303/8a304f4d32ce3777.html>〉（2025 年 3 月 15 日最終アクセス）

4) N4 とは日本語能力試験（JLPT）の試験レベルを表し、N5 から始まり N1 が最上級レベルとして設定されている。

5) 日本で 90 日以上滞在もしくは就労するために取得する必要がある書類。ビザ交付後に申請できる。

8:00 登校, 掃除

8:30 出欠確認, 身だしなみチェック, 自習

9:00-9:50 1時間目: 日本語(漢字)

10:00-10:50 2時間目: 日本語(文法・会話練習)

10:50-11:10 ラジオ体操

11:10-12:00 3時間目: 日本語(文法・会話練習)

12:00-13:00 昼食(各自弁当を持参)

13:00-13:30 掃除

13:30-14:20 4時間目: 日本語(文法・会話練習)

14:30-15:20 5時間目: 日本語(文法・会話練習)

15:30-16:20 6時間目: 日本語(文法・会話練習)

16:30-17:00 7時間目: 生活指導, 面接練習など

17:00-17:30 掃除

17:30 帰宅

学生たちは, 登校後当番制で教室や事務室を箒で掃いたりモップをかけたり雑巾で拭いたりするなど掃除に従事し, スタッフによるチェックを受ける。ただし, トイレ掃除だけは専門業者に外注されていた。次に担任が出欠を確認した後, 髭を剃っているか, 靴下をはいているか, 腕時計をつけているかなどの身だしなみチェックがある。2時間目と3時間目の間にNHKの動画を観ながら全員でラジオ体操。本社は特にラジオ体操に力を入れており, 折々に上層部から「汗ビッチョリに

なるまでやらせるように」など, 40度を超える炎天下のデリーでは無理難題と思えるような指示が入った。昼食は, 大半の学生は弁当を持参してきたが, 下宿先に帰宅して食べたり外食したりする者もいた。昼食後, 2度目の掃除。4時間目の授業の冒頭では本社社長の好きな五輪応援ソング「栄光の架け橋」を合唱するのが決まりとなっている。7時間目の授業の後3度目の掃除。9時間半に及ぶスケジュールを終えて, 学生たちはようやく帰路に着くことができる。

授業は, 本社の作成したオリジナルPPT教材と教科書『新・日本語の基礎』を用いて行なわれた。日本語のみを用いて授業する直接法が推奨されていたが, インド人教員はヒンディー語で教えていたようで, 筆者も学生の要望でしばしばヒンディー語で翻訳しながら教えていた。学生たちの多くは産業訓練校の出身で, 英語はあまり上手ではなかった。

こうしたハードな日課のほかにも, 教員への「おはようございます」「失礼します」「ありがとうございました」などの挨拶とお辞儀, 日本式のゴミの分別など, さまざまな厳しいルールが課せられていた。ルール違反をしたり成績のよくない者には教員やスタッフからの指導が入り, 本社や受け入れ企業に報告されることもあった。驚いたことに, 学生たちの多くはそれらのルールを従順に受け入れ, 適応しているように見えた。

一方で, 時折彼らがささやかな抵抗を見せることもあった。それは, 経験の浅い教員やスタッフに対して行なわれた。たとえば, ある日のテストで学生Hがカンニングをした

ことが発覚した際、筆者がHに追試を受けるよう指示すると、学生Sに「先生、前はみんな「カンニングを」やってたよ!」とHの救済措置を訴えられたことがある。別の日には「カリキュラムが速すぎる」と文句を言ったので進行を遅くしたら、今度は「遅すぎる」と騒ぎ出して筆者を困らせた。ほかに、インド人教員Rに対して学生たちが「教え方がよくない」と一齐に抗議し、怒ったRが授業を放棄したこともあった。

ゴミの分別に関しても、センター内の6種類ほどに分けられたゴミ箱はまったく使わず、外のゴミ箱に一緒にたにして捨てていた。ラクシャー・バンダンという兄弟姉妹を中心に家族が集まる祭の日には、マネジャーが社長に懇願して数日間休んだため、学生たちも授業を休みたいと主張し出し欠席を認めざるをえなかったこともあった。このように、相手や状況を選んで巧みにルールをかわしたり、異議申し立てをすることはあっても、全体的に学生たちは従順であり、熱心に日本語及び日本式の生活マナーを習得しようとする姿がみとめられた。

おわりに

日本に帰国後、筆者は数ヵ月間元教え子にオンラインで日本語を教えていた。彼らによ

れば、毎日2時間以上の残業、もしくは土日のどちらかに出勤するなど、最低賃金で週に50時間程度の労働に従事しているという。時々給料の安さに愚痴はこぼすものの、「日本の生活はいいです」と口をそろえる。何か不満はないのか尋ねたら、教え子のひとりとはX社で学んだ5S（整理 Seiri, 整頓 Seiton, 清掃 Seisou, 清潔 Seiketsu, しつけ Shitsuke）が職場で守られていないことだと答えた。X社での教育実践が功を奏し、ある意味日本人以上に日本人化しているのかもしれない。その一方、ふだんの食生活はインドにいた時と同じ内容で、ベジタリアンだからスシを食べたことがないという。身体・物質面では自分たちが馴染んできたものにこだわりながら、精神面では柔軟に相手や環境に対応する。そうした頑固さと柔軟さを併せもち状況に応じて適度に使い分けることが、異国で労働移民として生き抜くコツなのかもしれない。今後彼らがどのように「日本人」と「インド人」の間で人格そして人生を構築していくのか、陰ながら見守っていきたい。

引用文献

栗田陽子. 2018. 「東北で働くブータン人技能実習生」『東北文化研究室紀要』59: 49-62.

信仰の場を訪れて

——スルヤラヤ教団におけるマナーキブの記録——

阪 口 諒 祐*

私は、現代インドネシアのイスラームにおける「穏健」概念に関心を寄せている。これは、イスラーム過激派による非人道的なテロ事件などを背景に打ち出された、平和で寛容なイスラームの在り方であり、近年活発に議論されている。私はこのテーマを、国家や宗教エリートから発せられた政策や言説だけでなく、草の根のムスリムに着目する民衆の視点から「穏健」概念の諸相を探っている。その際、イスラーム神秘主義（スーフィズム）と、その実践共同体であるタリーカ（スーフィー教団）を分析の中心に据え、彼らの宗教実践を通じて「穏健」がいかに現場で体现され、再解釈されるのかを明らかにしようとしている。

本稿では、私が調査対象としているカーディリー・ナクシュバンディー・ポンドック・ブサントレン・スルヤラヤ教団（以下スルヤラヤ教団）で行なわれるマナーキブ（*Manaqib*）と呼ばれる儀式の様子を紹介する。マナーキブは本来、カーディリー教団の祖であるアブドゥル・カーディル・ギーラーニーの伝記を読誦することを目的とするもので聖者への称賛と接近を目的としている。これはスーフィズムの思想におけるファナー

（自己滅却）の一端ともいえ、スーフィー修行の一環として捉えられている [Hakim 2020]。

マナーキブは通常、イスラーム暦の毎月 11 日にスルヤラヤ教団の本部のモスクで行なわれ、毎度数千人の信徒が訪れる。今回は、スルヤラヤ教団のジャカルタ支部長を務めるキヤイ・ワヒューディン氏からのご厚意による招待があり、初めて実現したもので、自力ではたどり着くのが難しい山間のこの地に足を運べたこと自体、大変光栄なことだった。本部のスルヤラヤ教団は西ジャワ州に位置し、首都ジャカルタからは 5 時間ほどかかるため、現地に前乗りする形で同行させてもらった。宿泊地にはすでに多くの信徒が宿泊しており、中には国外から訪れている人もいた。

儀式の様子

儀式の朝は、想像以上に早かった。夜明け前からすでに多くの信徒たちが集まり、礼拝を済ませた人々が静かに開会を待っていた。私たちがモスクに到着した頃には、礼拝堂の中は人でぎゅうぎゅうに埋め尽くされており、もはや通路らしい通路も見えないほど

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 モスクの様子

だった（写真1）。人々は床に座り、中央の講壇を囲むように身を寄せ合い、合図を待っていた。

儀式は、まずクルアーンの読誦から始まる。続いて、スルヤラヤ教団の創設者であるアバ・スプ（Abah Sepuh）が編纂した教訓集『タンビーフ』（*Tanbih*）の朗誦が行なわれる。タンビーフには、信仰と倫理、師弟関係や国家への忠誠に至るまで、教団の信条を形づくる多くの指針が記されており、スルヤラヤの信徒たちにとって毎回のマナーキブでこのテキストに立ち返ることは、宗教的な誓いを新たに重要な行為である。

タンビーフの朗誦が終わると、いよいよこの儀式の核心部分であるマナーキブの朗読に移る。朗読されるのは、スーフィーの偉大な

聖者であり、TQN（タリーカ・カーディリーヤ＝ナクシュバンディーヤ）の源流をなすシャイフ・アブドゥル・カーディル・ジラーニー（Abdul Qadir al-Jilani）の伝記である。このテキストには、彼の高德な生涯や数々のカラーマ（霊的奇跡）が語られており、朗読係が抑揚をつけながらゆっくりと読み上げる声に、参加者は深く耳を傾けていた。マナーキブの朗読が終わると、教団の高位指導者による説教が行なわれた。この講話は月ごとに担当が異なるというが、この日は長年教団に仕える教師が登壇し、信仰の堅持、師弟の絆、そして現代社会におけるスーフィーの役割について語った。その内容は決して抽象的な神秘思想にとどまらず、日常の中で信仰をどう実践していくかという、地に足のついた話も行なうそうである。最後に、全員で預言者ムハンマドに祝祷（サラワット）を唱え、閉会の辞が述べられ、儀式は正式に締めくくられる。

ワヒューディン氏はモスクに到着すると、迷うことなく奥へと進み、儀式に参加していった。信者としての務めを果たすその背中を見送りながら、私はひとり、モスクの内外を歩いてみることにした。すでにモスクの中は、座る場所を確保するのも難しいほどの人々で埋め尽くされていた。中に入りきれなかった参加者たちは、建物の外や廊下、日陰になる壁際などに腰を下ろし、それぞれが手にしたスマートフォンで、儀式の様子をYouTubeのライブ配信を通じて視聴していた。モスクの周囲には、教団に関連するいくつかのプサントレン（イスラーム寄宿学校）



写真 2 モスク外の市場が賑わっている様子

が点在しており、子どもたちもまた自分たちの場所で儀式に参加していた。中には、ラジオや配信音声を聴きながら、一緒にズィクル¹⁾やタンビーフの読誦を行なっている姿も見られた。彼らの無垢な声が時おり風に乗って聞こえてきた。また、全国各地から集まる大規模な集会ということもあり、モスクの外には所狭しと屋台や露店が並び、まるでお祭りのような賑わいを見せていた（写真 2）。香辛料の効いた焼き物の匂いや、揚げ菓子を売る掛け声が飛び交い、ある店ではアバ・スプの肖像画が描かれた額縁が売られ、またある店ではスルヤラヤ教団が独自に発行した教典や小冊子が並べられていた。こうして歩きながら私は、宗教儀式という限られた場面だ

けではなく、それを取り巻く人々の振る舞いや空間そのものから、スルヤラヤ教団の宗教実践がいかに生活に根づいたものであるかを、肌で感じていた。

儀式が終わって

儀式が終わり、会場の熱気も少し落ち着いてきた頃、私は改めてゆっくりとモスクの内部を見て回ることができた。昼どきの時間帯で、信者たちはモスクの片隅や屋外の本陰などに腰を下ろし、モスクのスタッフによって用意された炊き出しの食事を囲んでいた。私たちもその食事をいただくことになり、皿に盛られた温かいごはんとおかずを手に、静かに腰を下ろす。食事の場には、ジャカルタをはじめ各地の支部から集まった指導者たちもいて、いくつかの会話を交わす機会に恵まれた。

食事を終えると、案内してくれたワヒューディン氏が「せっかくだから」と声をかけてくれ、モスクの最上部にある墓所へと連れて行ってくれた。モスクの横にある緩やかな階段を登っていくと、スルヤラヤ教団におけるこの場所の象徴的な意味合いを感じさせる「Puncak Suryalaya（スルヤラヤの頂点）」と書かれた看板が見えてきた。墓所には、教団の創始者であるアバ・スプとその親族が眠っており、儀式を終えた多くの信者たちが列をなして順番に参詣に訪れていた。墓前では、集団でクルアーンの読誦をし、ズィクルを行っていた。私もまた、その場の空気に導か

1) アッラーの名を含む唱句を繰り返し唱える修行のこと。



写真3 墓所の様子

れるように墓前に立ち、しばらくのあいだ何も言葉を発さず、ただ黙って立ち尽くした。スルヤラヤという空間の中心に立つこの墓所は、単なる遺体の眠る場所ではなく、教団の霊的な起点として人々の心のよりどころとなっていることを、肌で感じる時間だった(写真3)。

再び、モスクの下に降りてくると、ワヒューディン氏から「どうでしたか、今日のマナーキブは」と尋ねられた。私がまだ言葉を探していると、彼は続けて「ここで信徒が集まることによって、教団の幅広い連帯を示しているんです」とつぶやいた。私は帰路の途中、この一日を静かに振り返っていた。マナーキブを通して私が見たのは壮大な儀礼でも綿密に構築された神秘体系でもなかった。

そこにあったのは、ごく日常にある祈りと、その場に身を置く人々のまなざしだった。

穏健の在りか

今回のマナーキブ体験が、私の研究テーマであるイスラームにおける「穏健」概念と直接的に結びついていただけではない。国家政策として提示される「穏健イスラーム」や、それに付随する宗教的規範、公共言説とは一線を画し、儀式の場で交わされた言葉や行為のひとつひとつは、いずれも個人の信仰と日常生活の中に静かに溶け込んでいるように思えた。

けれども、そうした一見「周縁的」に見える営みにこそ、民衆が体现する「穏健さ」の本質が宿っているのではないかととも考えるようになった。そこには、「穏健」とか「中道」といった言葉で定義される以前の、より深く、より具体的な態度のようなものがあった。「穏健さ」というものは、理念として外から定義されるものではなく、むしろ人々のまなざしや振る舞い、集う場の空気の中に、すでに息づいているのではないだろうか。言い換えれば、それはひとつの「在り方」として、身体的に実践されているのだ。特別な教義や高度な言説を必要とせずとも、ある空間に身を置くことで自然と表れる信仰の態度。それが、儀式の場に満ちていた「穏健さ」の感触だった。この日私が見たもの、聞いたもの、感じたものは、直接的なデータとしては研究成果にならないかもしれない。しかし、それは私にとって、「穏健とは何か」という問いをもう一度立ち上げ直すための、大切な

手がかりになったように思う。そこには、制度や政策の枠を越えて、信仰が生きている現場の「呼吸」があった。

引用文献

Hakim, Budi Rahman. 2020. *Actualization of Neo-Sufism: A Case Study of the Tariqa Qadiriyya Naqshabandiyya Pondok Pesantren Suryalaya*. Ph. D. thesis, Tilburg University, Netherlands.

シロアリ採りの季節

——ザンビア北東部マンブウェ農村における雨季の暮らし——

笠原 望*

マンブウェの暮らす土地

「ムバラ？なんでそんな遠いところにいるんだ！」私がザンビアの首都ルサカで人びとに調査地の話をすると、たいていこのような言葉が返ってくる。しかし、私が「マンブウェの村で調査している」と答えると、ほとんどの人は納得する。

私の調査地はザンビア北部州北東部のムバラ県にあり、マンブウェの人びとが多く住んでいる地域である。隣国タンザニアとの国境までわずか 20 km に位置し、首都のルサカから 1,000 km 以上も離れ、長距離バスを乗り継ぎ、片道の移動だけでも最低 2 日以上もかかる。この遠隔地に、調査対象であるマンブウェの人びとは暮らしている。マンブウェは北部州のなかでも北東部を中心に居住し、農業を主な生業とする民族である。その人口は 15 万人ほどである。首都のルサカや

北部州の州都でマンブウェ語を話すと、「ムバラから来たのか？」と聞かれることもあり、ムバラはマンブウェの住む土地として認識されている。

2023 年 11 月、乾季から雨季へ移り変わり、これから農繁期で人びとが忙しくなる。そんな時期に私は初めてマンブウェの人びとが暮らす農村に入り、ある家族にお世話になることとなった。滞在先の家がある村には、チレンガ (*cilenga*) と呼ばれる直径が 7 m から 10 m ほどの草木が生い茂る小さな丘が点在している (写真 1)。

この小さな丘 (チレンガ) はシロアリ塚である。シロアリ (*inswa*) は、時間をかけて塚の裾野を広げ、その形を半球状にしている。マンブウェの農村においては、このチレンガが畑のなかにある場合にはそのまま耕起したり、草木を残して放置する場合もある。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 畑中央の草木が生えている場所がチレンガ（丘）（2024年10月撮影）



写真2 表土とともに草本を切り返して作られた円形のマウンド（2023年12月撮影）

私は2023年11月から2024年1月にかけて実施した1回目の現地調査で、マンブウェの人たちがチレンガからシロアリを採集する季節に滞在した。

マンブウェ農村におけるシロアリ採り

私が調査地でお世話になった家には父1人、母2人、同居している子どもや孫が10人もいた。初回の調査時、マンブウェ語のテキストや辞書もなく、私はひたすら2人のお母さんや子どもたちとともに畑に通う日々を送っていた。マンブウェは表土とともに草本をマウンド状に積み上げて土壌にすき込み、その腐植を利用する農法を営んできた[Stromgaard 1990]。滞在先の家族も、円形のマウンドや畝をいくつも作り、サツマイモやキャッサバ、インゲンマメを作付けしている（写真2）。

マウンドづくりは重労働で、私も作業に参加したが、きれいな円形のマウンドを作るのは想像以上に難しく、時間がかかる。早々に

家族から戦力外通告をされてしまい、その後は近くで子どもたちと畑の除草をしていた。そうして数週間が経ち、村での生活が少し分かりはじめた12月のなかばだった。いつものように農作業を終えた帰り道、近所に住む子どもたちがチレンガに集まっているのが見えた。聞くと、シロアリを採集しているという。

マンブウェの村では、シロアリを採る時には、まずシロアリの棲むチレンガの上部を掘って鍋を置く。その上に同じくらいの大きさの鍋を、下に置いた鍋と内側が向かい合うように口を少しずらしてかぶせ、土で周りを固める。置いた鍋に草本をのせて、上に置いた鍋のフチに「おとり」となる羽アリの羽を、土で接着する。おとりが羽をバタバタと動かすと、その音や振動を察知した他の羽アリが、被せた草などを伝って集まり、鍋のなかに落ちる（写真3）。アフリカの各地では、雨季のはじめに雌雄の羽アリが同時に巣から飛び立ち、つがいとなって新しいコロニーを



写真3 チレンガに仕掛けられた鍋に溜まったシロアリ（2023年12月撮影）

作る群飛¹⁾を起こす。マンブウェは、おとりの羽アリに群飛を模した音を出させ、羽アリをおびき寄せて採集している。

チレンガに登ってみると、土中にいくつも鍋が埋められ、シロアリの小さな羽音がそこかしこで聞こえていた。子どもたちは自分の家から持ってきた鍋をのぞき込み、羽アリが集まっているのを見て、うれしそうにはしゃいでいた。その日を境にして、子どもたちは近所の子らとともに、バケツや鍋を持って毎日シロアリ採りへ出かけていくようになった。午前中は畑で播種や除草作業の手伝いをし、お昼ごはんを食べてしばらくすると、バケツや鍋を持って勢よく出ていく。チレンガに鍬で穴を掘って草木と鍋を設置したら、

後はシロアリが溜まるまで時々確認しながら近くで遊んだり、畑へ行って親たちと農作業をする。夕暮れ時になると、子どもたちは自分が仕掛けた鍋を回収し、なかに集まったシロア리를バケツへ移してフタをし、家路につく。

端境期の食を彩るシロアリ

採集したシロアリは、お母さんたちによってすぐに調理される。シロア리를、鍋に入れて炒め、ザルに移してふるって羽を落とし、食べないヘイタイアリ (*marenje*) を1匹ずつ手ではじき、羽のなくなった羽アリを食べる。初めて子どもたちのシロアリ採りを見た日に、夕食で食べた人生初のシロアリは、エビの尻尾にたっぷり脂がのったような味がした。シロアリ自体に強い味はないため非常に食べやすく、脂が豊富だからか、調理油を使って炒めたわけでもないのに、シロアリをつまんだ手は脂でテカテカしていた。子どもたちは競うようにシロアリに手を伸ばし、その日の夕食は賑やかだった。

シロアリ採りが始まってから、畑から帰宅した子どもたちと私の仕事は、もっぱらシロアリの選別作業になった。持ち帰られたシロアリは、羽アリだけでなくヘイタイアリもまじっているため、食卓に出す前に仕分ける作業が必要なのだ。お母さんたちは、懐中電灯をともし、農作業で疲れた体を休める間もなく、夕食の主食であるシマ²⁾の調理に取り掛かる。そのかわりで、私は調理の手伝いや

1) シロアリの生殖階級である羽アリが空中を飛び交い、交尾する現象。

2) トウモロコシの練り粥、ザンビアの代表的な主食。



写真4 子どもたちが採集した大量のシロアリ
(2023年12月撮影)

段取りが分からず、ヘッドライトで手元を照らしながら、羽アリをひたすら選別していた。12月の末から1月のなかばにかけては、子どもたちが毎日のようにシロアリを採ってきたため、昼間の休憩時間もシロアリの選別をしていた。そうして選別された大量のシロアリは、主食のシマと食べる以外にも、お酒のつまみやスナックのように食べられた。短い期間ではあったが、シロアリは雨季はじめの風物詩となっていた(写真4)。

ザンビア北東部でシロアリが採れる雨季の12月のなかばから2月にかけては、マンブウェの人びとが農作業で非常に忙しい農繁期であると同時に、食料が乏しくなる端境期でもある。乾季には豊富にあった副食に使うインゲンマメやラッカセイなどの食材は、播種用にまわされる。加えて、雨季のはじめに化

学肥料などの農業投入材を購入するため、おかずになる小魚を頻繁に購入する経済的余裕もなくなる。さらに、女性たちが農作業で忙しくなり、食材の調達や調理が間に合わず、徐々に食事回数や量が少なくなる。滞在中は少ないおかずをみんなで少しずつ分けあったり、インゲンマメを煮た後の鍋を抱えて、残った煮汁をおかずにしたりすることもある。シロアリはタンパク質や脂質が豊富なだけでなく、鉄や亜鉛、カルシウム、ビタミンなども多く含み、栄養価の高い食材である[山科 2023: 212]。そのため食料、とくに副食材が不足しがちな時期には、シロアリは子どもでも調達でき、栄養価もあって、おいしい、とてもうれしく、ありがたいおかずとなる。

シロアリのもたらす恵みと禁断の味

1月になって雨季の中盤に入り、家族と同じように、シマのおかずや昼間の休憩時間にシロアリを食べる機会と量が増えていくと、私の体調に少しずつ変化があった。体調不良というわけではないが、下痢気味になった。後から考えると、調理油をほとんど使わない食事をしていたのに、脂質の多いシロアリを毎日大量に食べていたら、おなかがゆるくなることもあるだろうと思った。ただ、下痢気味でも私が食事をとらなければ、体調が悪いのかと家族に心配させてしまう。何より、家族はうれしそうに、そしておいしそうにシロアリを食べ、私にも「もっと食べなさい」と強く勧めてくれる。私はその様子を見ていると「シロアリを食べることができない」とは

言えなかった。お世話になってまだ1ヵ月半で、家族との関係を築きはじめたばかり、私のマンブウェ語もひどく、「食べたいけれど、食べることができない」と伝えることができなかった。初回の調査では、村を離れるまで続いたおなかの不調の原因が分からないまま、帰国することになった。

2024年度の2回目の調査では、以前お世話になった同じ家に、ふたたび滞在した。思っていることを自然にマンブウェ語で話せるようになり、家族と会話もはずむようになった。しかし、これからシロアリ採りが盛んになる12月なかばに村を去ることとなり、おなかの調子がよいまま帰国した。

もしまたシロアリ採りの季節に滞在する機会があれば、おなかの不調が起きるのかを確かめてみたい。ただ、おなかの調子が悪く

なったとしても、雨季のはじまりにはきっと、家族と一緒にシロアリを食べずにはいられないと思う。脂がたっぷりのシロアリの味を、忘れることができない。

子どもたちが鍋を手にチレンガへ楽しげに向かう後ろ姿を見守りながら、私は毎晩シロアリの選別に勤しむ。そんなシロアリ採りの季節をまた、マンブウェの家族とともに過ごしたいと思っている。

引用文献

- 山科千里. 2023. 『土の塔に木が生えて—シロアリ塚からはじまる小さな森の話』京都大学学術出版会.
- Stromgaard, P. 1990. Effects of Mound-Cultivation on Concentration of Nutrients in a Zambian Miombo Woodland Soil, *Agriculture, Ecosystems and Environment* 32: 295–313.

ヒマーラヤにたなびく葬送の煙

吉田 巖 嗣*

死とはなにか。人間にとって、おそらくもっとも根源的な問いのひとつである。それは死がわたしたちのだれもがむかえる生の終わりを意味するというだけではなく、生きていることの外側から不意にやってきて、ついにだれも理解したことがないものであること

に由来する。ふだん、わたしたちの多くは死を忘却している。考えようによっては、死とはごく単純な事実である。だれもが死ぬという言明は、しごく当然のことであり、いささかのあいまいさもたないかのようにみえる。しかし、それは臆見にすぎない。わたし

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

たちが死にゆくものであることとはどのようなことか。この問いは、まぎれもなく人間的なものであると同時に、人間的であることをその外側へと開いていかないことには答えようがないものである。生にとっての死は、死そのものではありえないのだから。

その不可知なものと向き合う人びとの姿を、わたしはネパール・ヒマラヤのふもと、の村セルトゥン（Sertung）で目のあたりにした。その村に住まうタマン（Tamang）の人びとにとって、死んだものを送り出すことは、わたしが想像するよりもはるかに重要なことであるようにおもえた。それはたんなる信念としては片づけることができない、人びとの世界における根源的なものを垣間みせている。死んだものはどこへゆくのか。死んだものはどのようにして先祖となるのか。葬送の場に居合わせたとき、わたしはこうした問いと真摯に向き合うように強く迫られたのである。これらに明確な答えを見出すことは、いまのわたしの力量をはるかに越え出ている。ただ、この断章では、わたしがその場で経験した出来事―すすり泣きと歌声と読経、丘の上に運ばれる死者の棺、煙のゆくえ―こうした光景をできるかぎり書き留めておきたい。

朝、石造りの家々のあいだから、亡くなった老婆を悼む歌声がひびいてきた。ある家にあつまった女たちが歌っているのだ。歌声にはすすり泣きがまじる。ひとりひとりの朗唱が順々に重なり合って、対位法的な響きを生み出していた。その家から少し離れた広場に男たちはあつまりはじめていた。一面にむし

ろが敷かれた広場の奥には祭壇が設けられており、その上には布が張り渡され、数十人を収容できるような日陰をつくっていた。日差しは強かった。ガネッシュ・ヒマール（Ganesh Himal）の峰々は、午前の太陽を浴びて、ぼおっと霞んでみえた。

まもなく、儀礼の供物づくりがはじまった。赤と白に色をつけた穀物の粉を練って、2人の男がトルマ（*torma*）をつくる。トルマとは、竹の子のようなかたちの小さな供物である。かたちが異なるそれぞれをテンマ、カルトル、チェト、マルトルとよぶ。これらのトルマを銀色の小皿にのせて、祭壇にならべてゆく。祭壇には3枚のタンカ（*thangka*；仏画）が掲げられ、そのもとに数本の灯明がつけられる。これからはじまる儀礼は、カトマンドゥで亡くなった老婆の法事なのだという。本式の葬儀はすでにカトマンドゥでおこなわれた。老婆の遺体はもはやない。

午後、深い臙脂色の衣を身につけたラマ（*lama*；僧侶）たちが読経をはじめようとしていた。右手にでんでん太鼓、左手に釣鐘型の鈴をもった数人のラマたち。それにつづき、ほかの者たちも楽器をかまえた。シンバルが鋭く打ち鳴らされ、大小のラッパが時に低く、時に甲高い音を放つ。湾曲したばちが振り下ろされると、柄のついた大きな太鼓は鈍い音を響かせた。

乾いた土埃のなか、列をなした人びとがやってくる。先頭の男は香炉を振りながら、ラマと一群の人びとを先導する。ラマは左手で鈴を鳴らし、右手で薄黄色の大きな布の一端を引いていた。その布のもういっぽうの端

は、骨壺なのだろうか、なにか大きな箱のようなものを包んでいる。その包みをかかえて歩く数人の男たちにつづいて、おおぜいの女たちが来る。めいめい大皿や籠にチャパティや橙色の花、灯明をのせ、髪を振り乱して、嘆きの歌を歌いながら、みな年老いている。

広場ではラマたちの読経がつづいている。そこへ女たちの歌が溶け込んでゆく。広場は人びとで埋め尽くされる。いつのまにか読経は旋律をもった声明へと変化した。鈴の音と人びとの声が重なり合う。声明の一節がおわると、ラッパやシンバルの演奏が挿入される。それが交互につづく。こうした声明と演奏の繰り返しが一段落すると、数人の男が参加者たちにビスケットやチウラ（*chiura*：焼き米）を配りはじめた。群衆の端のほうに座っていたわたしにまで、ビスケットのお裾分けがまわってくる。

ふたたび声明が盛り上がりを見せる。太鼓のリズムにのせて、チベット仏教の真言である「オムマニペメフム」に節をつけて歌う。しかし、それはよく知られた節回しーカトマンドウのボウダナート寺院で耳にするようなもの一とはやや異なる。旋律の跳躍が少ない3つのフレーズからなる楽節を繰り返す。おだやかな声明の響きが広場に満ちる。

どうやら儀礼はおわったようだ。参加者たちに酒やスプライト、ジャガイモとキノコと豆の料理がふるまわれる。洗面器のような皿に盛った料理をかこんで、みな打ち解けて話をはじめ。わたしはほとんど英語を解さない男たちの輪のなかで、酒をすすめられ、料理をすすめられる。ある男は、はやくも酔い

が回ってしまったようだ、わたしにしきりに話しかけてくる。しかし、わたしには彼の言いたいことが半分もわからなかった。

昨夜、またひとり、老婆が亡くなったとの知らせがあった。昼すぎから葬儀がある。宿の主人、ナルマン氏はそう言った。わたしは同宿のフランス人、サイモンとともに、ナルマン氏の案内を請うた。おもいがけず立て続けに法事と葬儀に立ち会う機会をえて、わたしは落ち着いてはいられなかった。仮にも人類学を志す者として、この機会を逃すべきではないとおもわれたのだ。

きのうとは別の家の前庭にテントが建てられ、人びとがあつまっていた（写真1）。まもなく、法螺貝、太鼓、シンバルの音とともに

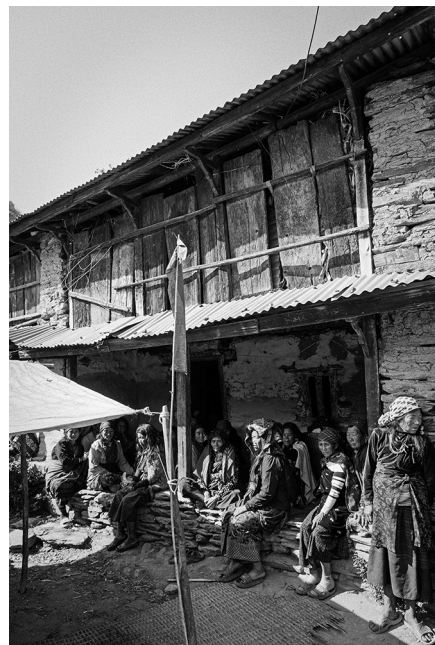


写真1 葬儀にあつまった女たち

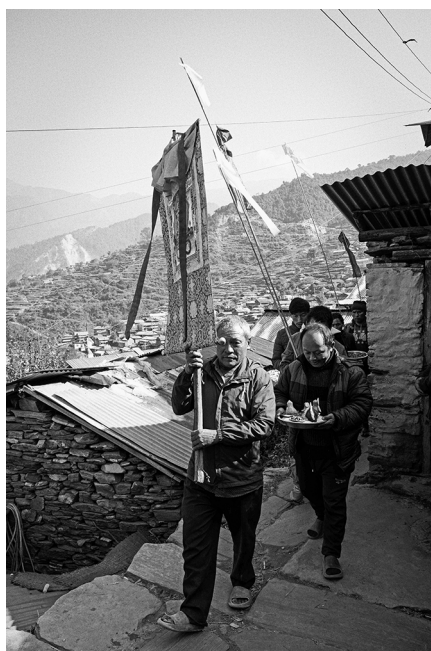


写真2 葬列の先頭



写真3 薪を担ぐ男たち

に葬列がやってくる。先頭にはタンカを掲げた男、そのあとを楽隊、そしてラマがつづく。ひとりの男が布にくるまれた大鍋のようなものを背負っている。それが老婆の棺だった。行列が広場に入ってくる。棺は広場の中央に安置された。その上には青・白・赤・緑・黄の布切れからなる天蓋がかけられた。群集は広場に収まりきらず、家々のあいだの狭い道にまであふれ出していた。

しばらくして葬列はふたたび整った(写真2)。人びとの列は広場を出て、村外れの丘へとつづく。サイモンとわたしは男たちにまじって薪を担ぐ(写真3)。ふりかえれば、眼下に広がる家々は小さくなり、その向こうにはヒマラヤの峰々が静かに連なっていた。

丘の上には祭儀場があった。色あせた五色の祈祷旗や、張り渡された紐に結えつけられたたくさんの白いカタ(khata; スカーフ)がはためいている。その一角に設けられたトタンの大屋根の下、老婆の棺を中心に、親族とおもわれる人びとが幾重もの輪をつくる。きのうの法事で酔っぱらってわたしに絡んできた年配の男は、きょうは遺族の一員として神妙な面持ちを浮かべ、いまにも涙ぐみさえしそうであった。

わたしたちは、ほかの男たちとともに少し離れた場所で待つ。サイモンは、この村の学校建設にかかわりはじめて数年になる。しかし、彼にとっても、ここで葬儀を目にするのははじめてのことだという。ナルマン氏は、サイモンとわたしに状況を話して聞かせる。

亡くなった老婆は91歳だった。「10年ほど前に息子を亡くしてから、頭がおかしくなった」とナルマン氏は言う。娘は2人いる。いまひとりの到着を待っているのだ。

ナルマン氏の説明はつづく。「葬儀のあと、7日ごとにプジャ（*puja*；儀礼）をする。それを7週間後の49日まで続けるのだ」

「49日というのは日本でもおなじだ」と、わたしは言った。

葬儀を執り行なうのはラマの重要な仕事だ。あるひとりのラマは25年間、ダージリンの僧院で修行を積んだ。2年前に1,400人が受験した僧侶の試験に合格した2人のうちの1人なのだという。妻帯せず、肉を食べず、僧侶としての仕事だけをしている。この地域では、妻帯しないラマは彼をふくめて2人しかいない。ほかの多くのラマは、半僧半俗の生活を送っている。それだけに、人びとが彼に寄せる尊敬はきわめて厚いのだという。

しだいに日は傾いてゆく。娘はいつやってくるのだ。カトマンドゥからのジープが到着するのを、わたしたちは待ち続ける。そのとき、ざわめきが起った。娘が来たのだ。

駆けつけた娘は、老婆の棺を前に泣き崩れた。まもなく棺は担がれ、ラマの先導のもと火葬台へと運ばれる。男たちだけがその場に残った。病気で亡くなった息子の代わりを、親戚の男3人が務める。3人の男たちは時計回りに棺をまわりながら、嘆きの歌を歌う。鮮やかな赤色の布に包まれた遺体は「大鍋」のなかから出され、組まれた薪の上に注意深



写真4 火葬

く安置された。赤と白の小旗を薪にさす。薪に火がつけられた。その上に、さまざまな模様のついた赤い布を何枚も重ねてかける。最後に花柄模様の大きな黄色い布をかぶせる。しだいに白い煙が立ち始める（写真4）。

「もうわたしたちは去ろう。ずっとここに留まることはできない」とナルマン氏は言った。わたしたちは火葬場を離れ、足早に丘をくだりはじめた。ナルマン氏は水場で立ち止まり、手を洗い、顔を洗った。サイモンとわたしもそれにならった。ふりかえると、ガネッシュ・ヒマールのパビル（Pabil）峰が向こうの稜線に顔をのぞかせているのが見えた。火葬場から立ちのぼる一条の白い煙は、風に吹かれてゆっくりと空に消えていった。

炎に託された祈り

——リアウ州バカル・トンカンを訪ねて——

吉 位 優 作 *

京都の夏の風物詩といえば、「五山の送り火」を思い浮かべる方が多いだろう。私の院生室がある京都大学総合研究2号館の4階から見る、燃えさかる「大」の字は圧巻であり、京都に来て良かったと感じることのできる瞬間である。2024年、私は遠くインドネシアの地で、また別の「炎の行事」に出会うことになった。

バカル・トンカンの由来と意味

2024年6月、私はインドネシア共和国スマトラ島東海岸に位置するリアウ州に滞在していた。目的は、リアウ州ロカン・ヒリル県の県都バガンシアピアピで毎年開催される「バカル・トンカン (Bakar Tongkang)」と呼ばれる祭りに参加するためである。ジャカルタから国内線でリアウ州都プカンバルに飛び、そこから車で約5時間。舗装されていない道路に揺られながら、ようやくたどり着いたバガンシアピアピは、人口約8万人の港町だ。

バカル・トンカンは、全長約9メートルの木製の船の模型（トンカン）を燃やす宗教儀礼で、19世紀に中国の福建省から移住してきた中国系漁民たちによって始められた

とされる。福建省出身の移民たちは、長い航海を経てこの地にたどり着き、安住の地と定めたことを象徴的に示すために、それまで使用していた木製の船（トンカン）を焼却した。この行為は、「もう二度と故郷に帰らない」という永住の誓いであると同時に、航海の安全を導いた海の神への感謝と、祖先への供養を意味している [Nyoto *et al.* 2023]。

毎年旧暦の5月16日にあたる日を中心に、国内外から数万人の参拝者が集まり、町全体が祭り一色に染まる。祭礼に用いられるトンカンは町の中心部にある最も大きな華人廟である永福宮 (Eng Hok Kong) に安置され、出発の時を待っていた。このトンカンは、地元の木工職人たちが数ヶ月かけて製作したもので、龍の頭部や色鮮やかな装飾が施されている (写真1)。

二つの前夜祭

夜になると、バガンシアピアピの町では二つの大規模な前夜祭イベントが同時開催された。ひとつは華人コミュニティを対象としたイベントで、台湾から人気歌手を招いたコンサートであった。会場は街の中心にあるホールに設けられる。多くの華人が詰めかけ、会

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 祭りで使用されるトンカン



写真2 街を練り歩くトンカン

場の外にまでプラスチック椅子が並び、立ち見の人々が大勢いた。もうひとつのイベントは、華人以外の住民を中心としたもので、華人向けの前夜祭会場から目と鼻の先にある野外ステージでジャカルタから人気バンドが招かれていた。しかし、この日はあいにくの雨で、屋根付きの華人向けイベントは大いに賑わった一方、野外のイベントは観客がまばらで、来賓席にも空席が目立っていた。私が野外イベントを見ていると「日本人か？ここに座れ」と言われて一番の特等席に座ることができたほど人は少なかった。

焼却の儀式一天に昇る願い

翌 22 日、いよいよバカール・トンカン当日を迎える。参拝者たちは手に赤く長い線香を持ち、顔の前に掲げながら静かに祈りを捧げる。「祖先が我々を見守ってくれますように」「家族の健康と商売繁盛を」といった願いが、立ちのぼる煙に託されていくようだ。午後 2 時、永福宮に色とりどりに輝くトンカンが姿を現した。その瞬間、「うおー！」

という歓声が沸き起こり、参拝者たちは一斉にスマートフォンやカメラを向ける。龍の頭部の精巧な彫刻、赤と金で彩色された船体、そして高くそびえる帆柱の美しさに、思わず息を呑む。行列が始まると、私もその列に加わったが、数万本の線香から立ちのぼる煙が顔の周囲に充満し、さらに非常に多くの人が密集していたため、途中で列を外れ、やや離れた場所から行列を見守ることにした（写真 2）。

行列は町の主要な通りをゆっくりと進み、約 30 分後にトンカンが焼かれる河岸の特別会場へと到着した。そこには前日から準備された数万枚もの紙銭が山のように積まれている。この紙銭は、あの世の祖先たちに送る「お金」を意味し、信者たちが 1 枚 1 枚に願いを込めて奉納したものである。午後 2 時、いよいよクライマックスの時間が近づく。リアウ州知事が壇上に立ちトンカンに近づく。会場は水を打ったように静まり返り、数万人の視線が一点に集中した。「3, 2, 1…」のカウントダウンの後、知事がトーチでトンカ



写真3 燃やされるトンカン

ンに点火する。瞬く間に炎が紙銭に燃え移り、巨大な炎の渦となって天へと昇っていく。オレンジ色の炎の中で金色の紙銭がひらひらと舞い上がり、その光景はまるで本当に祖先にお金が届いているかのような幻想的な美しさを呈していた（写真3）。

多様性と祭りへの参加

この3日間の祭り期間中、町内の大きな華人廟では訪れた人々に無料で食事が提供されていた。私が21日正午に訪れた時、食事会場には300人ほどが集まり、賑やかに昼食をとっていた（写真4）。会場には長いテーブルがいくつも並び、老若男女が肩を寄せ合って食事を楽しんでいる。華人廟職員の話によれば、これらの費用はすべて信者からの寄付によって賄われており、「宗教や民族にかかわらず誰でも食事をとることができる」とのことであった。実際、私のような外国人にも分け隔てなく食事が提供された。ただし、私の見た限りでは、イスラム教徒の方が食事をしている様子はなく、宗教的な配慮か



写真4 寺院での食事会場

ら控えているようであった。バカル・トンカン祭には、主に華人が中心となって参加しているが、町に住むムスリム住民もまったく無関係というわけではない。たとえば、祭り当日には、華人の参拝者たちがトンカンの周囲を取り囲む一方で、ムスリム住民の多くはトンカンの焼却場を隔てる水路の向こう側から、その様子を静かに見守っていた。宗教的な違いから儀礼の中心には加わらないものの、地域社会の一員として、祭りの盛り上がりや遠くから共有しているようにみえた。異なる信仰をもつ人々が互いを認め合いながら共存する、現代インドネシアの縮図がそこにはあった。

さらに、経済的な面からみれば、ムスリム住民にとってもこの祭りは極めて重要な機会となっている。祭り期間中、会場周辺には地元の住民による屋台が立ち並び、飲食物や土産物などが活発に売買されていた。宿泊施設も多くの来訪者で満室となり、普段は静かな町が一気に観光都市へと変貌する。私が話を聞いたベチャ（becak）と呼ばれる三輪バイ

クタクシーの運転手は、「ふだんは 1 日 5 万ルピア（約 500 円）稼げればよい方だが、バカル・トンカンの時期はその 10 倍以上、1 日 50 万ルピア以上稼ぐこともある」と笑顔で語ってくれた。信仰の有無にかかわらず、町全体に活気と潤いをもたらすこの行事は、宗教儀礼であると同時に地域経済のエンジンでもあるのだ。

バカル・トンカンのクライマックスは、燃え尽きたトンカンのマストがどちらの方向に倒れるかによって翌年の吉凶を占うというものである。この占いは数百年にわたって継承されてきた伝統で、地域住民にとって重要な指針となっている。マストが海側に倒れれば漁業が繁栄し、豊漁に恵まれるとされる。

一方、陸側に倒れれば農業や商業が栄え、町全体の経済発展が期待できると信じられている。炎が収まり、マストが倒れる瞬間まで、会場の誰もが固唾を呑んで見守る。2024 年は、炎上から約 30 分後、ゆっくりと陸側に倒れた。その瞬間、会場からは大きな歓声が沸き起こった。

引用文献

- Nyoto, N., I. Effendi, E. Evizariza and I. Effendi. 2023. Bakar Tongkang Festival in Bagansiapiapi, Indonesia—from Chinese Fisherman Ritual to Tourism and Economic Impact, *Review of Applied Socio-Economic Research* 26(2): 83–93.

「結婚」をめぐる私のフィールド体験

金 信 光 恵 *

「次の土曜日、結婚式をします。来られる？」
2024 年 12 月初旬のある日、WhatsApp の通知が鳴った。送り主はセネガル人の女友だちファティマ（仮名）である。えっ、結婚式？結婚の予定どころか、彼女に恋人がいたことすら初耳である。寝耳に水とはこのことだった。「おめでとう。行きます！」私は二つ返事で参列を表明した。セネガルの結婚式って

どんな感じなんだろう。式には誰が、どんな格好で来るのだろう。どんな料理が出てくるのだろう。想像が膨らむ。

しかし、今は木曜日の夜 7 時である。結婚式があるという「次の土曜日」とは明後日のことだ。どうしよう、時間がない。何を着ていけば、何を持っていけばいいの？というかそもそも、結婚式の招待が前々日に送られ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

てくるものなのだろうか？

早速私はホストマザーに相談した。「セネガルの正装を仕立てなさい。明日仕立屋に行けば当日には間に合うから」と、ありがたいことに知り合いの仕立屋を紹介してくれた。プレゼントに何を持っていけばいいか尋ねたら、「何でもいいけど、無難なのは封筒にお金を包んで持っていくことかな。値段は相手の立場や関係性にもよるけど、10,000フラン（日本円で約2,500円）包めば間違いないよ」とのことだ。ふーん、セネガルにも「ご祝儀」があるのか。なんて思いながら、教えてもらった仕立屋の番号を早速電話帳に登録し、彼のWhatsAppに連絡したのだった。

セネガルの女性たちは本当におしゃれだ。街に出れば、色とりどりのワックス¹⁾や、艶やかに輝くバザン²⁾を、自身の寸法にぴったりに合わせて仕立てた服を身に纏った女性たちに出会う。私はその度に目を奪われる。調査のために、私は映画祭や、とある女性団体の創立記念シンポジウムに参加したが、そこでも美しく着飾った女性たちで溢れかえっていた。どんな恰好で行けばよいかわからずに、適当なTシャツとズボンを着て参加した自分を心から恥じることになった。私も、この滞在中に何としてでもセネガルの「一張羅」を仕立てねばと、華やかな彼女たちに囲まれながら自らを戒めたのだった。

だから、これはいい機会である。ダカールの雑踏としたマルシェの中に分け入り、ホス

トマザーに教えてもらった仕立屋のところまで、道行く人に尋ねながらなんとか辿り着いた。土曜日の昼下がりのことである。

「〇〇（ホストマザーの名前）から聞いていると思うけど、明日の夜結婚式に着ていくための服が必要なの。今から仕立てて、明日の夕方までに間に合う？」

「うん、問題ないよ。どんな服を仕立てたい？」

そう聞かれて、私はいつしか街のショーウィンドウで見かけて、かわいいなと思い、心に留めていた服のデザインを彼のノートに描いた。セットアップのように上下に分かれていて、上半身の袖口と裾がフリルになったものである。そして早速採寸に入る。彼は私の全身を慣れた手つきでメジャーで採寸していく。その後、スカートや袖口の丈はどの長さにするか、裏地の布は何色がいいか、背中チャックのモチーフはどれがいいか、スカートのウエストにはゴムを入れるか入れないかなど、細部の装飾を2人で詰めていった。

すべての打ち合わせを終えて、持参したワックスを手渡した私に、「明日の午後2時頃取りに来てね」と彼は言った。本当にその時間に間に合うのだろうかと思案していたが、彼は本当に午後2時に間に合わせてくれた。そして完成品は期待以上の出来だった。これで今夜の結婚式に行ける！と、ドレスと馬車を手に入れたシンデレラよろしく心の中でガッツポーズした。

1) セネガルにおけるアフリカンプリント布の呼称。

2) ダマスク織のコットン布。セネガルではおしゃれ着や礼服として最も一般的な布。

結婚、と聞いて私の脳裏に浮かぶのは、セネガルの代表的な文学作品のひとつである『かくも長き手紙』[バー 1981 (原著刊行 1979 年)] だ。主人公のラマトゥライが幼馴染の親友であるアイサトゥと長い手紙を交し合うという書簡体小説である。その 2 人の女性は自身の夫が突如第二夫人を娶ったことに苦しみ、葛藤することになる。一夫多妻制の問題を女性の側から初めて語った小説であるといわれている。

私は大学院に入学したての頃にこの本と出会い、その中に散りばめられた数々の言葉に心惹かれた。困難で理不尽な状況下で苦しみながらも、女性たちが絶望の中から希望を見出し、国家や女性の未来を熱く語る本書に導かれ、私は自らの研究テーマを「セネガルにおける女性運動／フェミニズム運動」³⁾ と決めたのだった。このような文学を生んだ国の女性運動とは、フェミニズム運動とはどのようなものなのだろうかと、理解しなくなったのだ。彼女ら／彼らは、現状の何に問題を感じ、怒り、変革しようと望んでいるのだろうか？

こうして調査でセネガルに来た私に紹介されたのが友人ファティマだった。彼女はダカールとパリで学位を取り、その経験を生かしてジェンダー学の研究者やコンサルタントとして働いている。

1 ヶ月前、あれは 11 月の中旬、ファティマとダカールの海沿いのカフェにいた時だっ

た。私は彼女にこんな質問をしてみた。「一夫多妻についてどう思う？ どうして男の人には認められて女の人には認められていないの？」

ちょうどその頃、私は参与観察先の女性支援団体で、同僚たちが一夫多妻の是非について喧々諤々と議論をしているのに居合わせたところだった。「一夫多妻は女性に対する暴力と支配の一形態だと思う。女には認められてないのに男にだけ認められてるっておかしくない？」そう同僚のひとりに同意を求められ、しかし外国人で、この国の文化や宗教についてはんの学びたての私が、ここで自分の考えとやらを本当に口にしていいいのだろうか…と逡巡したのだった。

ファティマの答えはこうだった。「私は一夫多妻はただの選択肢のひとつだと思う。たとえば、若いうちに結婚相手が見つからなかった高学歴の女性が第二、第三夫人を選ぶことはよくあるよ。博士課程まで勉強を続けた私の友人もそうだった。ひとりで夫の面倒を見なくていい、仕事を続けやすいという理由で選ぶ人もいる。

女性が複数の夫をもてないことに関しては、まあこの社会は家父長的だからね…。でも、イスラームは女性を大切にす宗教だよ。夫には妻や子どもを養う義務があるけど、妻は自分で得たお金は自分のものとして所有することができる。一夫多妻制の家族でも、夫はすべての妻を対等に扱わないといけないこと

3) セネガルにおいて女性の社会運動は「女性運動 (un mouvement féminin)」を自称するものと「フェミニズム運動 (un mouvement féministe)」を自称するものがある [Guèye 2015]。ここでは「女性運動／フェミニズム運動」と 2 つの表記を行なうことにした。

にはなってる。まあ、いつもそれが守れているとは思わないけど…。子どもがいい大人に成長し、社会的に成功したら、それは母親の手柄だと見做されるよ。そんな風に物事にはいろんな面があると思う。」

そんな風に、ファティマはさまざまな視点から私の疑問や質問に答えてくれて、たくさんのお話をしてくれる。私にとってかけがえのない人である。そんな彼女が選んだ人生の伴侶に今から会えるのだろうかと思いがちながら、仕立てたばかりのドレスを身に纏い、タクシーに乗って式場に向かった。

日が沈みかけた時分に式場に到着した。入り口には、引出物と思しきお菓子やジュースがバッグに入ってたたくさん置かれている。

会場には煌びやかで色鮮やかな衣装を纏った人々が参列していた。しばらくすると、グリオ（語り部）がスピーカーで音楽を流し、太鼓を叩きながら歌を歌い始めた。「グリオは何を話しているの？」と隣の人に尋ねると、「新郎新婦を褒めたたえたり、今後の夫婦生活について語っているんだよ」と教えてくれる。周りの人たちも音楽に合わせて手を叩いたり、踊ったりしている。私も見よう見まねで踊ってみる。そうしていると、会場は段々と盛り上がってきた。

しばらくすると、花嫁が純白のドレスに身を包んでやってきた。参列者が次々に、おめでとう、きれいだね、と言いながら挨拶をする。私も、「結婚おめでとう。サヴァ（調子はどう）？」と尋ねると、「ファティゲ（疲れた）」と返事が返ってきた。確かに顔はや

つれている。

ひとしきり歌って踊った後に出された食事を食べながら、ファティマや参列者と喋る。ファティマが言うにはこういうことだった。

結婚の日取りは両親が今週火曜日に突然決めた。だから、私は急遽ウェディングドレスを仕立てて、会場の手配や招待状の送付をしなければいけなかった。本当はもっと余裕のある日程で準備したかったけど、親の希望には逆らえなかった。

そういえば、会場には新郎はおろか、男性がほとんどいない。どうして夫はここにいないの？と尋ねると、セネガルにはさまざまな種類の結婚式があるが、イスラーム教では女性男性が別会場の場合も多いとのことである。さらに聞いたところによると、新郎は仕事で今国外におり、ファティマは式を簡略化するために男性用のパーティーは開催しないことにしたそうだった。

日本でもかつては結婚式といえば家族、親戚、友人、職場の人々を招待して盛大に執り行なうものだったのが、コロナ禍以降フォトウェディングだけで済ませたり、家族内内で執り行なったり、ごく親しい友人だけを招待したりなど、より多様に、簡略化する流れになっているし、そういうこともあるのかな、と思いながら聞いていた。

ひとしきり食べて、語り合った満足気の参列者たちが少しずつ会場を後にし始めた頃、ファティマに尋ねてみた。「夫とは、どういう風にして出会ったの？」

彼女ははにかみながら、「また近いうち、家に遊びに来てよ。その時に夫も交えてゆっ

くり話すね」と答えてくれた。

なんだか今日は、セネガルの社会に少しだけでも深く入り込めた気がして嬉しくなった。次の「恋バナ」をする約束を楽しみにしながら、私は帰路に着いた。

引 用 文 献

バー, マリアマ. 1981. 『かくも長き手紙』中島弘二訳, 講談社.

Guèye, N. S. 2015. *Mouvements sociaux des femmes au Sénégal*. Dakar: CODESRIA.